

亜矢 令和4年11月度特別作品

ピアノと私

亜矢

子供の頃に習っていたピアノを再開するきっかけとなったのは、息子が習い始めたことです。芸術は、私にとって欠かせないものです。心のこもった音をだすことが、苦手を私ですが、できるだけ長く続けたいと思っています。

秋晴や子を送り出しピアノ室

片手づつさらふ小節昼の月

秋ともし指番子を書き込みて

花木槿モーツアルトの和音かな

月の夜や手擦れの多き教則本

秋の星辞書で調ぶるイタリア語

玄閑に小菊を生けてピアノ弾く

黒鍵をすべる指先うそ寒し

目をつむりピアノに向ふ秋日かな

冬近し楽譜に付きし閑きぐせ

《作品鑑賞》

すみれ

この度の亜矢さんの作品は、「ピアノと私」というタイトルが新鮮で、弾む想いで読ませていただきました。私もピアノが大好きで、作品の一句一句に同感しました。

秋晴や子を送り出しピアノ室

朝の家事を終え、ほっとしてピアノに向かう。至福のひとときを感じられます。

花木槿モーツアルトの和音かな

大好きなモーツアルトの曲。どうも思うような音色が出せない。ふと窓越しの木槿を見て、また弾き始めたのではないでしょうか。

黒鍵をすべる指先うそ寒し

黒鍵の奥ゆかしい、少し籠った音が何とも美しい。あっという間に時間が立ったのでしょうか。

よい作品に触れ、ピアノが弾きたくなりました。

暁子 令和4年11月度特別作品

冬の虹 暁子

小豆島から祖谷、大歩危に行ってきました。広島からあまり遠くない所ですが、私には初めての行程でした。初冬の天気は目まぐるしく変わり、少々難儀もしましたが、いろいろな風景を見ることができました。小豆島が思いのほか大きな島であること、吉野川の流孔の清らかなこと、特に大歩危の谷の深さには心を動かされました。季節を変えて、また行きたいと思っています。

オリーブの島に懸かりて冬の虹

放哉も歩きし路地と花八つ手

大木に冬の日照雨の降りにけり

冬の月おぼろに懸かる屋島かな

低く飛ぶ鳥の来てる冬の浜

大歩危の時雨れてるたり川下り

冬紅葉先行く舟は淵に入り

冬の谷小石の落つる音しきり

寒禽の歩いてるたり沈下橋

時雨るるや札所の門に杖を置き

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

作者は、自宅や近くの山を歩いて自然を詠む句を多くつくられているが、今回は、四国への旅を詠まれた。言葉の豊かな、詩心のある俳人の作風を存分に味わえる特別作品となっている。

放哉も歩きし路地と花八つ手

尾崎放哉は、自由律俳句の俳人、「咳をしても一人」は、晩年小豆島の寺の庵に暮らした放哉の句である。放哉の生涯を思いながら、作者は小豆島を歩く。「花八つ手」の地味ながら存在感のある季節が生きる。

冬の月おぼろに懸かる屋島かな

屋島は山頂が屋根のように平らな形で、国の天然記念物に指定されている。その特徴ある島の上に冬の月がぼんやりと懸かっている。どこか異国のような風情を漂わせる句だ。

冬紅葉先行く舟は淵に入り

先を行く川下りの船が、流れのゆっくりとした淵に入っていく。美しく色を変えた紅葉を見るのだろうか。作者の乗る船も、また同じように淵に寄っていくのだ。